

HCC Best Practice



兵庫医科大学超音波センターにおける肝細胞癌治療の取り組み 超音波ファーストでの的確な診断めざし、 多科連携により患者個々に適切な治療法を提案

Interview

飯島 尋子 先生

兵庫医科大学超音波センター長・内科肝胆膵科教授

兵庫医科大学の超音波センターは、現センター長の飯島尋子先生を中心に設立の構想が練られ、2005年頃から本格的に稼働した。現在は、飯島先生を筆頭に超音波指導医・専門医、超音波検査士が中心となって各診療科主治医と連携をとり、超音波ファーストによる的確で迅速な診断をめざしている。センター長の専門領域は消化器内科、なかでも肝臓を中心とした腹部領域だが、各診療科と連携しながら体表、循環器、血管、関節まで多岐にわたって診療している。年間検査数は約37,000件前後で推移しており、肝細胞癌に関してはRFAなどの治療も行われている。センターにおける肝細胞癌治療の取り組みについて、飯島先生からお話を伺った。

兵庫医科大学超音波センターの概要

1. 設立背景

今でこそ各地の病院で当たり前稼働されている超音波センター。しかし兵庫医科大学では、侵襲性の低い診断・治療が今後の主流となる兆しを見せ始めた1998年頃には、すでにその設立の構想が練られていたという。

超音波検査機器は、持ち運び可能な簡便な機器で、非侵襲的に実施できるため外来診療のどこにでも設置でき、いつでも施行できるのが利点だ。そのため消化器内科、腎臓内科、糖尿病内科、循環器内科、産婦人科、外

科など各診療科に設置されていることが多く、実際、兵庫医科大学と同規模の病院であれば、80台以上もの機器が院内に設置されていることも少なくないと聞く。

ところが、病院内の限られた予算で各診療科がそれぞれに検査機器を買うとなれば1台あたりにかかるコストは下げざるを得ず、比較的安価なものへと手が伸びる。しかし、「超音波検査のメリットを患者に最大限に還元したいのであれば、やはりそれなりの機器が必要になる」と飯島先生。

そこで、各診療科がそれぞれに機器を購入し所有することをやめ、コストを集中させて高性能の機器を購入し、共有で使用。各科の垣根を越えて集約的に診断・治療す